

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	管23K06	氏名	丸山 晃
研究主題	自尊感情を高める授業		
所属校	文京区立湯島小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>学校では、いじめ、学級崩壊、不登校、非行、自殺などの児童・生徒の問題行動の増加が指摘されている。これらの背景にある中心的な要因として、生きる力の基盤となっている自尊感情の低下が挙げられると指摘されている。「子供の問題の解決のキーワードは『自己肯定感』である。」「心の問題の背景には『自己肯定感が低いこと』という要因がある。」とも言われている。また、先行研究により、学年が上がるに連れて自尊感情は低下する傾向であることが明らかになっている。</p> <p>本研究では、自尊感情を「現在の自分の状態を受容したり、他者と関わったりすることで、自分を『かけがえのない存在』や『価値のある存在』と自己認識すること。」と定義した。さらに、自尊感情を構成する要因として、1 包み込まれ感覚、2 自己評価・自己受容、3 自己有用感・自己達成感、4 他者との関わりの4つの要因を設定した。そして、それぞれの要因について、学年による差と性別による差があるか実態を明らかにする。次に、児童の自尊感情を授業で高めることが可能であるかどうか、高められるとすれば、どのような授業を行えばよいのかを、特に「教師の褒める」という方策に焦点を当てて検討する。「教師の褒める」という方策により、児童の自尊感情が高まり、「児童の自力による問題解決」が促進されていくのかどうかを、意識調査と児童の学習感想の記述から明らかにするものである。</p>
II 研究の方法	<p>被験者は、都内A小学校の1年生から6年生までの児童240名(男子112名、女子128名、1年生44名、2年生37名、3年生41名、4年生40名、5年生40名、6年生38名)であった。これらの児童に、質問紙を配布し、16項目の質問項目について回答を求めた。質問項目は、ローゼンバーグの自尊感情の定義の基づき、4つの因子(1 包み込まれ感覚、2 自己評価・自己受容、3 自己有用感・自己達成感、4 他者との関わり)を設定した。作成にあたっては、「自尊感情測定尺度(東京都版)」(2011)「QOL尺度」「学級満足度尺度Q-U小学生版」(1999)を参考にした。質問に対する回答は、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」から1つ選ぶ4件法とした。また、学年、性別、氏名を記入させた。調査は、学級単位ごとの集団で行い、学級担任が質問用紙を配り実施した。学級担任には、実施マニュアルを配り、どの学級でも同じように調査が行われるようにした。第1回目の調査は、2011年10月2日～10月9日(検証授業前)、第2回目の調査は、2011年12月8日～12月14日(検証授業後)に実施した。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>第1回目の意識調査から、学年による平均値の有意差が見られた要因は、「自己評価・自己受容」「自己有用感・自己達成感」「他者との関わり」であり、学年が上がるに連れて自尊感情が低くなることが明らかになった。また、性別による平均値の有意差が見られた要因は、「包み込まれ感覚」「自己有用感・自己達成感」であり、女子の方が男子より高い得点であった。第2回目の意識調査では、教師の褒める行動が自尊感情を高めるために有効であったかどうかを明らかにするために行った。5年生では、4つの要因のいずれにおいても1回目と2回目の平均値に有意差が認められなかった。2年生では、「自己評価・自己受容」の1回目と2回目の平均値に有意差の傾向があることが認められた。さらに、2年生の実験群と統制群で比較すると、実験群では、「包み込まれ感覚」と「自己評価・自己受容」の平均値で有意差が認められた。また、授業で自尊感情を高めるための方策として教師の褒める行動に焦点をあて、12項目（1 児童への褒め言葉の増加，2 学習内容の効率化，3 発表活動の増加，4 自力で考え，問題を解く時間の確保，5 スモールステップでの授業展開，6 机間指導による解答の提示と指名予告，7 個別の評価による褒める機会の増大，8 学び方のルール徹底，9 褒め言葉集の作成と実施，10 ペア・グループによる学習，11 児童の多様な考え方の受容，12 学習指導案に自尊感情を高める方策を位置付け，指導の明確化）について実践をした。その結果、統計的な数値には表れなかったが、児童の学習感想や児童の授業中の行動を分析すると、教師の褒める行動によって、児童の自尊感情を高めたと考えられる児童の反応が個別に見られた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>包み込まれ感覚と学年の関連を考えると、小学校に在籍する年齢である6歳から12歳ごろの児童は、すでに包み込まれ感覚が育っていると考えられる。学校で、包み込まれ感覚を育てるには、教師の働きかけや学級経営が大きな影響を与えると考えられる。学年と自己評価・自己受容の関連について考えると、9歳頃の時期は、心身の変化が激しく不安定な時期であり、自尊感情が下がることは、発達段階の上で起こりうる感情の変化である。しかし、小学校では、教師の適切な関わり方を増やしたり、児童同士がふれあう活動を増やしたりするなどして、自尊感情を高めていく方策をとる必要があると考える。教師が褒めることを方策として行った検証授業の結果では、2年生では包み込まれ感覚と自己評価・自己受容が高まったと言える。5年生では、得点の平均値の有意差を認めることはできず、自尊感情が高まったとは言えなかった。しかし、児童の学習感想や表情から、自尊感情が高めることができたのではないかと考えられる。</p>